

初期生育確保のカギはきめ細かな水管理！
保温的水管理と土壌の異常還元(ワキ)予防で、分けつを促進しよう！

1 気象経過と管理のポイント

播種期以降、気温がやや高く、日照時間が長く経過したため、苗の生育は例年よりもやや進んでいる状況です。また、仙台管区气象台の1か月予報（5月12日発表）によると、向こう1か月の気温はほぼ平年並の見込みです。

管内では移植作業が順調に進んでいますが、苗の老化による初期生育不良を回避するため、適期内の早めに移植しましょう。また、移植後は、ワキを予防するきめ細かな水管理により根圏環境を整え、分けつを促進しましょう。

2 移植後のきめ細かな水管理で分けつ促進

○移植後【苗の保護、新根の発生促進】

・活着するまで水深4～5cm程度に湛水する。

○活着後【地温を高めるとともに、昼夜の温度格差をつけて分けつの発生促進】

・水深2～3cmの浅水管理とし、日中止水・夜間入水する。

○強風や低温が続くときは、やや深めの水深（4～5cm程度）とする。【苗の保護】

○除草剤散布後は7日間止水し、落水・かけ流しはしない。【防除効果低減防止、薬剤流出防止】

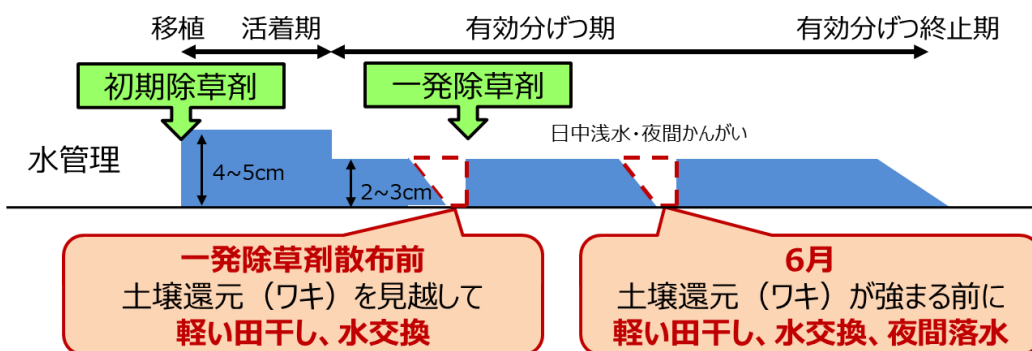
3 土壌の異常還元(ワキ)を予防する水管理で、初期生育を促進

湛水条件では土壌還元が徐々に進行します。特に、高温・多照の日が続くとワキが強まり、根の生育が阻害され、分けつの発生が抑制されます。下記の予防・対策を積極的に行い、生育を促進しましょう。

還元程度の違いによる根量の差
(R2年ポット栽培、移植20日後)

○予防策：一発処理除草剤散布前の軽い田干しや水交換

一発処理除草剤散布後は、少なくとも7日間湛水状態を保つ必要があるが、その間にワキが進む。そのため、一発処理除草剤散布前にワキの程度を確認し、軽い田干し（1～2日落水）や水交換を行う。



○分げつ期における対策：ワキの程度に応じた水管理

「ワキ」の悪影響を回避するには、稲に異常が見え始める前の“早目の対策”が重要。

田んぼに足を踏み込んで気泡の発生状況を確認し(表2)、ワキの程度に応じて「水交換」、「夜間落水」、「田干し(2～3日程度)」を行う。



ワキが発生した圃場に足を踏み込んだ時の様子

表 土壌還元(ワキ)の程度と対策

ワキの程度の目安	生育への影響	生育初期の対策
水田に足を踏み込むとわずかに気泡の発生がみられる	なし	—
水田に足を踏み込むと気泡の発生が多い	根の活力低下	速やかな水交換
水田に足を踏み込むと盛んに気泡を発生する	根張り不良	田干し、夜間落水

こまめに確認！ 早めの対策を！

4 苗の「老化」(葉齢が進みすぎて、葉色が淡くなる)が心配される場合の対応

①可能な範囲で移植日を前倒しし、苗が老化する前に移植する。

ハウスをしっかり開放してハウス内温度をできるだけ低くし、苗の生育を進めない。

②上記の①で十分な対応ができずに苗が老化しそうな場合は、移植の3日程度前までに、箱あたり窒素成分1gを追肥する。

5 効果的な除草剤の施用～ポイントは「散布時期」と「水管理」～

○散布時の水深は、剤型に応じた水深を確保する。

☑粒剤:3～5cm

☑ジャンボ剤、フロアブル剤:5cm以上

○除草剤散布後1週間は、水尻を止め、必ず“止め水”とする。

減水深が大きく、2日以上田面が出る場合、除草剤の処理層を壊さないよう“ゆっくり”入水する。

○圃場内の雑草の生育や薬剤使用基準を確認し、使用時期の範囲内で「やや早め」に散布する。

表層剥離がある場合は、水交換または田干し後に散布する

6 農薬だけに頼らない病虫害対策を

○いもち病対策

☑管内のいもち病初発は置き苗由来となることが多いので、補植終了後は、置き苗を速やかに処分する。

○斑点米カメムシ類対策～雑草対策の徹底が基本！～

☑農道・畦畔等の除草により、斑点米カメムシ類が生息しにくい環境をつくる。

☑圃場内の雑草の取りこぼしのないよう、体系的に除草剤を施用する。

STOP ! 農作業事故 < 春季農作業事故防止運動 4/10～6/10 >

◎ロータリー等の可動部を点検するときは必ずエンジンを止めて、巻き込まれ事故を防ぎましょう。

◎トラクターの路肩からの転倒・転落に気をつけ、危険箇所は無理せず、安全走行に心がけましょう。